

(様式1)

令和4年度 学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立両国小学校
校長名	渡邊 圭三

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">・全ての学年、領域で全国平均をほぼ上回る。4年国語、社会は、全ての観点で全国平均を10P以上上回る。・観点別で状況が良いのは、算数の「思考・判断・表現」、理科の「知識・技能」で、全国平均を5P以上上回る。国語の「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」で、4つの学年で全国平均を10P以上上回る。・基礎・活用別では、全ての学年で全受検教科の平均正答率で基礎より活用が上回る。・教科全体の経年変化で伸びているのは4年国語、5年算数・理科、6年理科で、とりわけ6年理科は6.3Pも上昇している。・D・E層の割合の経年比較では4年算数で3.9P減少している。	<ul style="list-style-type: none">→英語の教科平均正答率は全国平均より▲0.6Pで、他の教科と比較して数値が低い。・国語では「知識・技能」の観点が3つの学年で全国平均と比較して4P台の範囲にとどまる。国語の「読むこと」は1つの学年を除き「話すこと・聞くこと」「書くこと」と比較して低い。・基礎・活用別では、理科の基礎が5.6年で4P台と他と比べて低い傾向にある。→5年、6年の社会で伸び悩んでおり、とりわけ6年では3.3P下降している。→同比較、3年、5年の算数では8P程度上昇し、割合の減少に至っていない。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">・「不思議だな、どうしてだろうと思ったことを調べている」の肯定率は、学年間に差が見られるものの、概ねどの学年も全国平均を8~10P程度上回る。・「ノートの取り方について自分なりの工夫をしている」の肯定率は5年75.3Pで、全国平均より0.5P上回る。・「友達の意見を聞いて新しいことに気付いたり自分の考えが深められたりして面白い」の肯定率は6年80.0Pで、全国平均を10.4P上回る。・「タブレット端末等を使って話し合い活動が深まる」の肯定率は5年78.0P、6年76.0Pと7割を超える。	<ul style="list-style-type: none">・「勉強するときは自分で計画を立てている」の肯定率は、5年52.1P、6年58.0Pで、ともに6割に満たず、全国平均をそれぞれ約8P、2P下回る。・「テストで間違えた問題を後でやり直している」の肯定率は2年91.9Pだが、学年進行に伴い低下傾向にある。取組を徹底させ、習慣化を図りたい。・「考えたり頭を使ったりすることが好き」の肯定率は4年67.4Pに対して、5年48.0P、6年52.0Pと5割程度にとどまっている。

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・交流や話し合い活動で自分の考えを友だちに話す力は付いている。 ・算数の問題の答えのように明確な正誤がある問いに対しては自信をもって意欲的に発言する。 ・宿題に熱心に取り組んでいる家庭が多い一方で、家庭学習に関する温度差が大きい。 ・学校の授業の予習や復習を行う児童は、全国平均よりも上回っているが、取り組む児童の二極化が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的にすぐに答えを求めて、じっくり考えることを苦手とする児童が多い。 ・主体的な学びかできるように、ICTを活用した発表形態を取り入れたり、粘り強く取り組めるように時間を確保したりする必要がある。 ・学んだことを表現すること「書く力」について課題があり、具体的に書く力や意欲を高める機会を設ける必要がある。 ・宿題の提出に保護者は協力的である。しかし、学童や自宅で取り組む際には始めるまでに時間がかかったり、集中が続かず取り組みに時間がかかったりしているようである。 ・宿題を提出する児童と提出しない児童が固定化されている。そのため、多くの児童は家庭学習習慣が身に付いているものの、全員とはいえない状況である。家庭学習にほとんど取り組めていない児童は休み時間や放課後を利用しながら、無理ない範疇で支援を行う必要がある。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

上記の状況を踏まえ、本校がこれまで継続してきた「両国小・学力向上6つのチャレンジ」を修正を加えながら全校で取り組む。また、全学級の児童机・椅子の脚部分にテニスボールを装着した昨年度に続き、今年度は算数少人数教室やまなびの教室にも装着することで消音効果を高めて聴覚刺激を低減し、学習に集中できるようにした。また、教室前面を遮光カーテンに置き換えられるよう計画的に予算配当し、ICT機器がより効果的に活用できるよう、環境整備に努めている。

(1) 必ずテスト直しをすること（高学年では自己分析と学習計画も）

全学級で取り組んだはずであるが、「いつもやり直している」という意識の児童は学年進行するにつれて低下している。「やらなくても済んでいる」状況があり、個人差・学級差が生じている。第5・第6学年においては、直すだけでなく、誤答の原因を分析させ、そのためにどのような学習が必要なのか、主体的に計画を立てられるように指導する。

(2) 辞書をいつでも引けるようにすること

1年生からすべての教室に辞書を設置し、3年生以上は机の横に「辞書袋」をぶら下げるなど、家庭にも呼びかけ、辞書に親しむ環境を整えている。高学年の児童の語彙力は極めて高いので、他学年にも波及できるように、さらに習慣化するよう指導する。

(3) 地図帳をはじめ様々な地図や地球儀等を活用すること

「テレビの横に地図帳」を家庭にも呼びかけ、学校においても地図に親しむコーナーを設置している。校外学習等においても、地図を活用する場を設け、地図を読み、活用できる力を育成してきた。社会科の授業において、地図帳を活用する場面を意識的に増やすようにする。地球儀も身近に置いておきたい。

(4) 理科実験OJT及び理科室や学校園等の理科学習の環境整備

これまで「理科実験OJTの実施」「理科室及び準備室等の環境整備」等、理科学習の充実 に力を入れてきた。校内研究においても、理科分科会を設置し、理科の研究授業を重ねてきた。教科部会の理科部、校内研の理科分科会が中心となり、理科教育の充実をより一層推進する。

(5) 「両国小 板書・ノート作りの手引き」の活用と加除修正

「両国小 板書・ノート作りの手引き」を学力向上委員会と国語・社会・算数・理科担当が協働で作成し、全教員に配付された。その手引きをタブレット内で常時閲覧でき、授業改善に活かすことで、全学年の板書やノート指導が充実してきた。さらに、加除修正を加え共通理解を図るようにする。

(6) 「ピンポイント学習」の継続実施

各学年の苦手分野を朝学習で一斉に取り組む「ピンポイント学習」(月1回)を確実に実施したことにより、学力状況調査の結果に結びついた。全学級が同時に「ピンポイント学習」に取り組み、継続することが更なる成果を生み出すことになる。

(7) プラスの部分(4つの力の育成&基礎的・基本的な知識の定着)

☆ 校内研究で目指してきた4つの力「①思いや願いをもつ力、②読み取る力、③自ら表現する力、④関わり合う力」の育成を継続して目指し、とりわけ「②読み取る力」の重点化を図り、国語・理科を通して実践する。

☆ 基礎的・基本的な知識の定着を重点目標とし、家庭と学校が連携して児童の学びを支える。

3 「令和5年度 墨田区学習状況調査」における目標

(1) 目標

- ・ D・E層をC層に引き上げること。B層の上位をA層に引き上げること。
- ・ 意識調査において、「テスト直し」「自分で調べる」の完全定着を全学年8割以上に高めること。
- ・ 令和4年度の学習状況調査で平均正答率が低かった問題を「ピンポイント学習」で克服すること。